



Title	<精神障害をもつ人たちを地域で支える取り組み 「べてるの家」訪問研修報告> 未来に向かう文化
Author(s)	菊竹, 智之
Citation	臨床哲学. 2015, 16, p. 165-168
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/51596">https://hdl.handle.net/11094/51596</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 未来に向かう文化

菊竹 智之

べてるの家の人々は、とにかく明るい。彼らの集う「ニューべてる」は人数の割に手狭な施設だが、話し声と笑いが絶えない。さらに見学していたソーシャルスキルトレーニング（SST）に至っては、当事者同士の恋愛にも関係するデリケートな話にも見えたのだが、終止暗くなることもなく楽しそうに話す。こんな底抜けの明るさを持った集団を私はほかに知らない。私がべてるの家の活動に関心を持ち始めて二年ほどになる。障害との向き合い方、仕事や会社に対する考え方、彼らの仲間内でのつきあい方、当事者研究など、彼らの活動はどの一つをとっても興味深いものだが、彼らのことを知るうちに自然と私の興味は、それらの活動を貫いて存在している、あるいは貫いて支えているこの明るさに向かうようになった。

「今日の体調、気分は？（…）〇〇さん…いないねー、〇〇さん…」。こんな調子で、朝のミーティングの出勤確認が行われる。正確な数を数えたわけではないが、半数近くの人が欠勤だったのではないかと思う。「安心してサボれる会社づくり」とは、べてるの家が昔から掲げてきた標語の一つであるが、確かに欠勤に対して取り立てて反応することもない。もとよりメンバーの数に対してスタッフの数は非常に少ない。ゆえに一人のスタッフが一人のメンバーにつきっきりでサポートをするような場面はあまり見られない。一般的な「障害者の施設」をイメージして行くと、その「適当さ」というか、管理的でない姿勢に驚くだろう。一般的に精神の障害を抱えた人の関連施設は、どうしても利用者に問題を起こさせない、という管理的な方向に動きがちである。べてるの家はなぜそうならず成立しているのか。この「適当さ」は何によって可能になっているのか。そこに明るさの秘訣もあるように思われた。

先にも書いた朝のミーティングの中に、その疑問への回答となるような特徴があった。朝のミーティングでは、職員・メンバーの出勤・体調・気分・勤務時間の確認がとられた後、その日の予定が確認される。特別な行事ごと以外にも、昆布づめ、グッズなどの仕事の部門ごとに今日はどんな作業が進められるのかなども挙げられる。そうした中で当然重要なインフォメーションが行われていくわけだが、しかしそのインフォメーションは司会自ら

の手によって、度々中断される。中断されるのは決まって、その場に新しく人が来た時だ。遅れてきたメンバーや、仕事をしていてミーティングに出でいなかったスタッフなどが新しくミーティングの輪に加わったときのみならず、ただ横切った時でさえも、「〇〇さん、体調と気分は？」という問かけが投げかけられる。横切る人も一瞬立ち止まり、それに応えてまた通り過ぎてゆく。そしてミーティングの話は何事もなかったかのように再開される。ミーティングは終始ざわざわしているが、今日どのくらいどんな人が居るのかということ、おおよその感覚として把握される。

ほんの些細な出来事だが、こうした細かいところにこそ、その場の特徴というものが見られるものだと思う。例えば私たちがよく親しんでいる学校文化などでは、遅刻者は邪魔をしないようにこっそりと入って来るかなぜ遅刻したのかと問いただされるかのどちらかだ。しかしべてるではこのようにあっさりと、普通のこのようにして、そして確実に出勤や体調が確認される。このことから、べてるでは仕事内容の確認などにも勝って、お互いの状態を知っておくことが重要視されていることがうかがえる。

その後の出来事も同じように可笑しく見えた。朝のミーティングの後は本来、掃除→仕事→振り返りミーティング、となるようなのだが、この日は時間がないからということで、なんと午前中の仕事のカットされ、振り返りミーティングだけが行われるという奇妙な進み方をした。振り返りミーティングでは、午前中でよかったこと、悪かったこと、グループホームごとの近況などが報告された。

こうした習慣によって、メンバー間が相互に状態を知ることの意味の一つは、当然相互に助け合うことにある。例えばソーシャルスキルトレーニング（SST）の場面などでも、お互いが相手について知っていることや最近の状態をもとに助言が行われる場面が見られる。と同時にこの習慣は、彼らの一人一人が自分の行動を形作るためにも作用する。人数が足りなければある仕事をあきらめる、あるいは担当者がいない仕事先送りにされるなど、その日出勤しているメンバーによって今日施設で行われる仕事や予定は左右される。時々によって体調や気分が大きく異なったり、そもそも予定を立てるのが苦手であったり、予定ベースで未来の行動を形作っていけない彼らにあっては特に、このように現在の状況ベースで未来の行動を形作っていくことは必然でもあり、必要なことでもある。

未来に向かって状況を組み立て、行動していくという彼らの生活の特徴は、近年のべてるを語る上では欠かせない SST や当事者研究においても顕著な形で現れる。SST にもさまざまな手法があるが、べてるの家の SST で特徴的なのは、「スキル」というものの捉え方

が非常に具体的なことである。そこでは、社会で一般的に必要なスキルを身に着けることが必ずしも求められるわけではなく、当人が今まさに必要とする言葉や動作を身に着けることが目指される。私たちが見学した際に行われた SST においても、あるべてるメンバーが今まさに困っている問題を詳しく聞きこむことから始まった。そして、一体その出来事のどこが問題になっているのかを一緒に見極めていく中で、問題が換言されていき、その人の問題というだけでなく、一般に人が悩みうることとして共有されていく。そうすることによって、その場に居る参加者たちは我がことのように問題を見つめることができるようになり、それによって解決へのアイデアを提供できるようになっていく。そうやって出てきたアイデアをもとに、最終的には再び本人が自分の状況に引きつけて、「どのタイミングで、誰に、どのような対応をすればいいのか」といったことを練習することになる。

この特徴は当事者研究にも共通する。私が昨年個人的に訪問した際に参加した当事者研究と今回参加した SST とを比べてみても、当事者研究は SST から生まれてきた活動だというだけあって、その両者の違いは比重の置き所の違い程度のものだと感じた。当事者研究というと、自分の過去や病気について自分で知る、という部分に焦点が当てられがちであり、無論それは大事なことなのだが、彼らが自分のことを知りたいのは今まさに困っているからなのである。当事者研究においてはしばしば、自身の行動パターンや良くない状態におちいっていき条件が検討される。過去の語り直しや人間関係の語り直しなどは、そうした問題解決を目指す中で必然的に付随しておこってくるものようであり、それ自体が入り口ではない。そして行動パターンや調子のサイクルが明らかにされれば、加えて必ず、そのどの段階でどのような対処が可能なのか、ということまでが検討されていくのである。

「未来」という手あかのついた言葉を使うのに私はやや抵抗を持っているが、それでも表題としたのは、彼らが真に未来に向かっていていると感じたからである。彼らにとって未来という時間は、先にも述べたように、計画や予定に先取りされたものではない。また、無限に開かれた可能性や希望を象徴するものでもない。ただそれは、「今・ここ」から確かに踏み出す次のステップとして存在する。現状を見つめることがそのまま未来を見ることになっているともいえるのかもしれない。べてるの家において重要視されているのは、ミーティングの出席確認にしても当事者研究にしても、とにかく自分たちの状態を知り分かち合うことである。「べてるの家は今日も明日も問題だらけ、それで順調」という言葉の通り、

問題だらけの現状を受け止め、ともかくそれをもとにしてこれからどうするのが組み立てられる。こうして予定や計画ベースでなく状況をもとに未来の行動を組み立てていく限り、問題はたくさん起こっても、「失敗」は起こらない。だからべてるの家の人々は明るいのではないだろうか。どんなに問題だらけでも、あるいはもしかしたら問題だらけだから、きっとそこから出発することができるのだ。